

## 銃後と念仏

### 平和への戦

聖戦三周年の新春を迎えました。非常時中の非常時、日本はまことに重大な意義を持つ年を迎えたのであります。国民の一人でもが安閑としていたことの許されない、真に引きしまった生活をして、その拳国一致の総力を以て、この有史以来、未曾有の聖業を成就し、長期にわたってよく忍終精進の一道を歩む所の大覚悟を要するの秋であります。

あえてくり返すまでもないことではありますが、皇国が、東洋に、やがて世界に成就せんとするものは、民族の永遠の大理想たる、大和魂、即ち、真実平和の成就建設であります。国民の一人一人が、この明朗なる唯一の理想に対して、はつきりとした認識を持たねばなりません。戦のための戦や、呪咀憤怨の心に、真の力が出るものではない。今日ほどありがたく、かの

### 明治大帝の御製

「四方の海、皆はらからとおもふ世に、など波風のたちさはぐらん」  
との大御心をただかすにはいられない時はあり得ません。

我ら国民の心は現に、支部の同胞に向つて「おい兄弟」と、手をさしのべる心でいっぱいであります。そしてそれあるが故に、大陸に根強く巣くう、抗日容共の悪魔と戦わざるを得ない。しかも支那の人を敵としない。この心はとうてい西洋の人たちにはわからないそうであります。

東洋数億の同胞を、人類の敵、共産主義、クレムリンの支配下におくか、大御心の皇道安楽の大和の光懐におくか、聖戦の意義はここにあります。

悪草のはびこるに都合よく、平和柔軟の花の咲くに都合の悪いところの土地、荒れるにまかせたこの土地に、聖なる鋤を入れて耕してゆく、一時悪草が埋打ちにされて、地面が平でなくなるのは止むを得ない。しかしその耕された新しい畑に地ならしがされて、新しい種子がまかれ、肥料をやれば、そこに真実なる文化の華が咲きます。そこに長期建設の行歩が生れます。

### 平和への戦、聖戦！

理想は力と共にあらねばならない。手を懐にして、死の平和に、安逸を盗もうとすることは、理想の中に内在する願力が許さないのであります。かかる人を敵としなさい、平和への戦は、国内においてすら常にくり返されていることでもあります。今こそ、一億の民は、平和への使命に輝く道義建設の志士でなくてはなりません。日本は今、国際的重圧の下にあつて、この最大難事を成就すべく出発したのであります。いかなる困難が横たわろうが、ただ進むより外に道なき、必然の立場に立ったのであります。

### 一死奉公

「それでは先生、お別れします。」

「おお、たのむぞ。長年み法を聞いた貴方だ、今さら言うべきことはないが、遺骨になつて凱旋しても、もちろん悔いはあるまいね。」

「ありません。この高恩に報いてまいります。」

幾十百度くり返した言葉であります。雨の日も、風の日も、念仏しつつ、合掌して、無量寿の命に安住して、しかしながら苦闘力戦している同胞が忘れられようか。

日本国土の内には命を以て守らねばならぬものがある。

万世一系、万国無比の国体であり、この国体の懐に依つてのみ、繁茂し成長し、華を咲かせた、大乘仏教の真髄である。

国体を護る戦士は、国土が持つ文化を護る菩薩である。戦は思想と思想、文化と文化の戦である。我がものをいう限り、死は一切を失ふことである。しかし無我の大意に生きる限り、一死奉公は、そのまま真実の生である。しかして、仏教の法印は「無我」を置いて外にあり得ないのであります。

我らは今、皇軍の活躍の上に、銃後の至誠の上に、この無我の行を具体的に拝んでいます。

### 念仏の家庭

すでに聖戦の目的が大和にあります。大陸に向つて大和を成就せんとするの秋であります。その時、ひるがえつて眼を内に向けます。外に大和を、永遠の平和を成就せんとする国民が、果して、内に平和を、大和を成就しているではありませんようか。

私は、今日も毎日、悩める人、苦しむ人のお相手ばかりして、つくづく世の真相、世間の裏、奥の奥を知らされます。お相手になつて御法の話をしつつ、いかに人間の『我』が根強いものであるか、我執の抜けないものであるかを痛歎せざるを得ないとであります。

またと会われないこの非常時に、このお国を挙げて大事な秋に、家庭一つが治まらない、家庭の中に痴闇の病患を抱いたまゝで、愚痴の心に泣いている。国家の動きをよそに、悪の花が咲きはびこつている。悲しまないではいられないことでもあります。

まず家庭の中から平和を成就しよう、この簡単なことさえ容易に成就されないことでもあります。それで何でお国の為に生きられましょうぞ。家庭内の小喧嘩に家族が真暗になり、一社会、一学校、一団体の中で我の角をつき合せておつて、どうして、外に無私の行歩が向けられましょう。聖業に参加が出来るよう。

その時、私は念仏の家庭の尊さを思わざるを得ません。

### 帰依の力

聖徳太子は、日本の国に「帰依のころ」を植えつけて下さいました。仏法僧の三宝は、人の心に帰依のころを成就します。帰依のころに三宝は生きて来ます。人にして一度、この帰依の眼を開かれたならば、はじめて、一切の徳を拝まずにはいられなくなります。この徳への開眼こそ、如実の、真実の国民を生む唯一の方法であります。

盲であるならば、富士の姿がいかに尊厳であつても見ることは出来ない。心が盲であるならば、日本の国体がどれほど尊厳でも拝むことは出来ない。国体明澄の問題はついに、国民の開眼の問題に外ならない。国体そのものは、肇国ちやうこくの古より、尊厳そのものである。しかるに、盲目の民が、非国家非国体的な踊りを跳る、そこに嫌なこと的一切が生れるのであります。それはすべて盲目のためではないか。「具眼の士」が一世を率いるのは、そのためであります。眼なくして、どうして忠があらう、したがつて孝があらう。忠孝の大道も開かれたる眼によつて成就します。

親鸞聖人の「智慧の念仏」あるいは「信心の智慧」とは、まことに如来によつて開かれたる眼であります。この眼によつてのみ、光明を見出し、道を見出し、恩を見出し、力を得、歓喜を得るのであります。

大無量寿経の真実教をもてあそぶ者はいざ知らず、真実に念仏する人にして、不孝の子を見たことがないのはその為であります。

帰依のころは、無我のころであります。もし仏法を求めるものにして、「我得たり」と自ら高くとまれば「人我」と言われ、「我法賢し」といばれば、「法我」と叱られます。人法共に否定されたところに、真実無我なる帰依のころ、即ち念仏のころがあります。無我の信心がそれであります。この無我のころは、そのまま金剛不壊の本願力を内在せしむるところの真の力であります。ここにおいて、念仏のころは真の力であります。

今日ほどこの無我の信力の要求され、尊ばれる時はありますまい。一度この信力にして、自然に発動せんか、ついに何物もこれを碍げることとは出来ないが故に、「無碍の一道」と言われるのであります。ここにおいて帰依のころは、やがて真実の力を成就するのであります。

貪欲、瞋恚、愚痴、仏法のいわゆる三毒三垢の心から、何で真の力が生まれましようぞ。この三毒から生れたあらゆる力は、いかに根強くても、永遠を貫く力とはならない。帰依のころ、清浄真実の信心からのみ、底なき力が生れることであります。煩惱の自力でなくて、仏の他力本願からのみ、力が生れます。

陛下の大御心に帰依し奉り、御稜威の前にひれ伏す我が国は、国体そのものがすでに他力的であります。力は、国民の我によつて生れないで、大御心によつて生れるのであります。

三宝に対する帰依のころは、そのまま、御聖徳に対し奉つて合掌するころであります。合掌して憶え、大陸には、我が忠勇なる将兵は、一死奉公、あらゆる困苦欠乏と戦いつつあるではないか。憶うて涙せずにはいられようか。

心内にひそむ匪賊

光を見る眼は、闇を見る。外に徳を見る眼は、内に我において悪を見る。

この非常時にあたつて国土の内に憂うべき現状はないでありますか。この国を挙げて動員し滅私奉公の至誠に生きぬくべき時にあたつて、罪を犯してお上の手をわづらわすというが如きは、すでに言語道断にして論の外であります。国家の現状

を見る時、果してこれで皇国の民と言えようかと、眉をひそめないではおれない事実を、あまりに多く見ねばならないことを、悲しまないではいられませぬ。

国家の統制に服さず、法網をくぐって、この機会に火事盗人式に私利私欲を計る輩、皇軍兵士の遺族に対する国家の恩遇をめぐって、あさましき争いをおこすがごとき、とうてい言うに忍びざるがごとき無自覚なる行動、己の私欲を知って他に何ものをも見ず、何ら恥づることなくして、ただ五欲の享樂に耽けるがごとき、数多の事実を見なければならぬことを悲しまないではいられませぬ。

皇威の輝きたもうを拒み、大和実現の障碍となるものは、ただ大陸の中にあるのみでなく、国内にもまた無形のトーチカ陣のあることを知らなければなりません。

武力戦はやむを得ざるの方法であります。その背後には直ちに、経済戦がなされ、その奥には思想、精神の問題が控えております。最後という最後にものを言うものは、思想信念、即ち国民の魂であります。あえて言う、長期にわたって確乎不動の国民の魂であります。

お隣りには病む妻を残し、子を残して出征している。それを見ても何ともない。貧しき女が一人子を戦死せしめて、悲嘆にくれつつも、お国の為に尽くしたことを喜んでいる。それを見ても何ともない。自分の汚い遊興の方が忙しい。かかる人の心の内にこそ、蔣匪（しょうひ）が潜んでいるのではあるまいか。しかもそれが我らの心の奥底に頑張っているのではあるまいか。肩には国防婦人会のたすきをかけていつつ、純綿ものの買だめを考え、銃後の奉公に家を出ることには華々しくして、家にあつては我慢邪見（じょうけん）至らざるなく、家中の者を苦しめる。そうした心の底には、自力煩惱の匪賊が根強く巣くつて、不知不識（しらずしらず）の間に国家に毒しています。

私自身の中にこうした自力我慢のトーチカ陣を造っていることがわかるには、いかにすべきでありましょうか。

### 念仏報国

私は限りなく、お国のことが心配になればなるだけ、いよ／＼念仏の世界の尊さを思わないではいられません。

世には「そんな宗教の世界など、要するに個人の問題だ。」と、あつさり片づけてしまふ人があります。しかし、果たして個人だけの問題でありましょうか。私にはそうは思われない。一人の母が真に生きないでどこに生きた母があるう。一人の真の母は、やがて百千の母となつて世を動かし、一人の聖人は、幾百千年、億々の人を救います。私はむしろ、いい加減な百人より、一人の徹底せる人を求めて来ました。今からもまた一人を求めて歩むことでありましょう。一人の青年の生活は、一青年団の更生の力となり、一人の僧侶の自覚は一村一郡の光となります。

念仏の世界は、清白の大法がまことに徹底しきつたところに開ける世界であり、それを通して無明の闇、自力我慢が打ち壊（くだ）かれて、真実の自己を真に深く知らされたところに開かれる世界であります。であります故に、念仏の行者は、大地に合掌して、愚悪の自己を懺悔して生きますけれども、その上には、如来のみ光そのものが生きております。

いかにこの慚愧懺悔の人、感謝の人の報恩謝徳の生活が光っているか、私はこの尊  
さの数々を、今もまた拝みつつ、憶念しつつ、これを書いております。いかなる苦悩  
の中にも光るのはこの人であります。どんな貧しい中にも歡喜して生きるのはこの  
人であります。如何なる動乱の中にも安住するのはこの人であります。如来浄土の  
眞実を人生に顕現するのもこの人であります。一家の光もこの人であります。子孫  
に尊き血と徳を流すのもこの人であります。国土に随順しつつ、国土の奥深く、最高  
道義と文化の根を下すのもこの人であります。私は、それら一一について幾多の実例  
をあげたいけれども、その紙数がありません。

この度の事変を通して、私は宗教の分布状態と、銃後の奉公に、非常な密接な関係  
のあることを見出します。念仏の家、念仏の村、念仏の県と、それでないところとを  
比較して、うたた思い半ばにすぎることがあります。

眞実宗教を国土に成就することは、とても国家百年の大計どころではありません。  
まことに千万年の大計であります。一朝一夕にして、迷信や邪教を亡ぼして正信とな  
すことは出来ない。迷信邪教こそは、まことに人間のあさましい我の変形、貪欲の功  
利的邪心の変態が、宗教的形式をとっているにすぎません。今こそ一切を合掌のうち  
に受け取るべきを、神の上に転じて偶然の幸福や安全を求め、効果がなければ棄てて  
ゆく哀れむべき幽霊群に、どうして徹底した力がありました。

今や亜細亞大陸長期建設の大業は、我が民族の使命、必然の運命として荷負すべき  
に至りました。我らは、いよいよ忠実に教法に生きて、銃後のつとめを、無我の心、  
金剛の信力によつて成就させて頂きましょう。